

SHOW HEY シネマール4

★★★★

<h2>デトロイト</h2>	
2017年/アメリカ映画 配給：ロングライド/142分	
2018 (平成30) 年1月28 鑑賞	TOHOシネマズ西宮OS

Data
監督：キャスリン・ビグロー
脚本：マーク・ポール
出演：ジョン・ボイエガ/ウィル・ ポルター/アルジー・スミ ス/ジェイコブ・ラティモア /ジェイソン・ミッチェル/ ハンナ・マリー/ケイトリ ン・デヴァ/ジャック・レイ ナー/ベン・オトゥール/ネ イサン・デイヴィス・Jr./ ペイトン・アレックス・スミ ス

👁️👁️ みどころ

「南北戦争」で北軍に属したミシガン州の都市デトロイトは、ラストベルト（さびついた工業地帯）の白人票として、トランプ大統領の誕生に大きな役割を果たしたが、1967年のデトロイト暴動はなぜ起きたの・・・？

差別主義者の警官による黒人の射殺はなぜ？また、アルジェ・モーター事件での違法・不当な取り調べはいかに・・・？

アカデミー賞監督キャスリン・ビグローの視点と演出は相変わらず鋭いが、本作に見る民間の黒人ガードマンの視点は、まさに女性ならではの彼女の目そのもの・・・？

裁判を含めた結末にスッキリしないのは仕方ないが、アメリカではこれが現実。そして、その不満感は今でも何も解消されていないばかりか、ますます拡大するばかり・・・？さて、あなたの見解は？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■本年度アカデミー賞最有力！テーマは？監督は？■□■

トランプ政権が丸1年を迎える中で開かれた、1月28日の第75回ゴールデングローブ賞の発表式は、昨年10月に大物プロデューサー、ハーベイ・ワインスタイン氏が長年若い女優にセクハラ行為などを繰り返してきたと報じられたのがきっかけで、出席した女優全員が黒いドレス姿で臨んだことが大ニュースになった。作品としては、『シェイプ・オブ・ウォーター』（17年）が最多7部門にノミネート、『ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書』（17年）が主要6部門にノミネート、また、『ウィンストン・チャーチル ヒ

トラーから世界を救った男』(17年)が主演男優賞にノミネートされていたが、『デトロイト』はどの部門にもノミネートされていなかった。しかし、『デトロイト』のチラシや新聞の宣伝では、「アカデミー賞最有力者」の文字が躍っていた。それは、一体なぜ？

きっとそれは、女性初のアカデミー賞を受賞したキャスリン・ビグローが本作の監督を務めているからだ。ビグロー監督は第82回アカデミー賞で作品賞、監督賞等6部門を受賞した『ハート・ロッカー』(08年)ではイラク問題を取り上げ(『シネマルーム24』15頁参照)、『ゼロ・ダーク・サーティ』(12年)では、ビン・ラディンを追い詰めるという何ともスリリングなテーマを取り上げていた(『シネマルーム30』35頁参照)。そのことからわかるように、ビグロー監督は女性監督には珍しい社会派かつ硬派の監督だ。

本作がテーマとして取り上げた「デトロイト騒動」や「アルジェ・モートル事件」は日本人にはなじみが薄い、アメリカでは有名な事件らしい。したがって、社会派かつ硬派のビグロー監督が、1967年の事件発生から50年後の今、改めてそんな事件に光を当てて検証した本作に、アメリカの映画人が皆興味を持ったのは当然。しかし、それだけで直ちにアカデミー賞最有力になるの？それほど甘くはない、と私は思うのだが・・・。

■南北戦争でデトロイト(ミシガン州)はどっちに？■

アメリカの南北戦争(1861年~1865年)は、黒人奴隷の解放をめぐって、北部の23の「自由州」と南部の11の「奴隷州」が戦い、北部の勝利で終わったもの。その途中の1862年9月にリンカーンによる「奴隷解放宣言」に至ったが、そのリンカーンも1865年4月に暗殺されてしまった。

『風と共に去りぬ』(39年)の舞台となったアトランタのあるジョージア州や、『アラバマ物語』(62年)で有名なアラバマ州は南部奴隷州の有力な州だったのに対し、デトロイト市があるミシガン州は北部の自由州の1つだった。ちなみに、『ニュートンナイト 自由の旗をかかげた男』(16年)によって私をはじめで知ったジョーンズ自由州は、明治政府の「五箇条の御誓文」と同じように(?)①貧富の差を認めない、②何人も他の者に命令してはならない、③自分が作ったものを他者に搾取されることがあってはならない、④誰しも同じ人間である、なぜなら皆2本足で歩いているから、という「ジョーンズ自由州4原則」を掲げるユニークな州だった(『シネマルーム39』63頁参照)。

ミシガン州東部にあるデトロイト市は、自動車王ヘンリー・フォードが1903年に量産型の自動車工場を建設したことによって、以降全米No.1の自動車工業都市として発展した。その後は自動車産業が衰退していく中で映画産業の振興等を行なったが、十分な成果を残せなかった。そして、2016年11月のアメリカ大統領選挙では、デトロイトは「ラストベルト」(さびついた工業地帯)の代表都市として(?)、白人の雇用拡大を訴えるトランプ大統領の大票田となった。そう考えると、ジョージア州やアラバマ州は南北戦争後も黒人差別がひどいとしても、北部自由州に属していたミシガン州のデトロイトでは黒人

差別はあまりなかったのでは・・・？

■□■南北戦争100年後の黒人差別は？60年代の米国は？■□■

そう考えるのは日本人だけで、南北戦争終了後もアメリカの黒人差別は撤廃されることはなく、1960年代に「ベトナム戦争反対運動」と共に巻き起こった「公民権運動」は南部のみならず、アメリカ全土に広がっていった。その様子は、『マルコムX』（92年）や『グローリー ―明日への行進―』（15年）（『シネマルーム36』162頁参照）等を見ればよくわかる。

1961年1月に大統領に就任したJ・F・ケネディは、1962年10月～11月のキューバ危機での活躍が『13デイズ』（00年）の映画等でよく知られているが、「公民権運動」で彼の果たした役割も大きい。キング牧師が主導した「ワシントン大行進」は1963年8月28日、「セルマの行進」は1965年3月7日、そして「公民法」の制定は1964年だ。しかし、マルコムXは1965年2月に、キング牧師は1968年4月に暗殺されたのと同じように、ケネディ大統領も1963年11月に暗殺されてしまった。

しかして、公民権運動の広がる60年代の1967年7月12日にミシガン州デトロイトで起きたのが米史上最大級のデトロイト暴動だ。

■□■デトロイト暴動とは？■□■

2012年9月に当時の野田首相が尖閣諸島を国有化したことに端を発して盛り上がった反日運動の中、中国大陸に進出していた日本企業が「焼き討ち」を含む様々な暴動被害に遭う姿が報道されたが、本作のスクリーン上で見るデトロイト暴動はその比ではない。その発端はデトロイト市警が「ある酒場」を「摘発」したことだが、その摘発行為が目立つにつれて無法な摘発に抗議する黒人たちが次々と集まり、経営者や客を強制的に護送車の中に押し込む姿を見て激怒。投石から始まった警察への抗議は次第に商店の破壊、略奪、放火そして銃撃戦にまで広がっていった。尖閣諸島をめぐる日中対立問題についても、海上保安庁の対応で済ませるか、それとも自衛隊の出動を仰ぐかによって対応レベルは質的に変わるが、それと同じように、デトロイト暴動をめぐるのはデトロイト市警だけでは対応できなかったため、ミシガン州知事は州の軍隊の派遣を決めたから、暴動はさらにエスカレート。スクリーン上で見るその暴動ぶりはすごいから、まずはその惨状をしっかり目に焼き付けたい。

そんな混乱が続く中、デトロイト市警の警官フィリップ・クラウス（ウィル・ポールター）は同僚とともに1人の略奪犯を追う中、途中で背後から拳銃を発射。犯人は逮捕こそ免れたものの、その後死亡したことが確認されたから、これは警察官の職務執行としていかなもの？いくら犯人が逃げるからといって、背後から射殺していいの？デトロイト市警上層部はクラウスに対してその職務違反を厳しく追及すると警告したが、さて・・・。

■□■アルジェ・モーター事件とは？その問題点は？■□■

1967年7月に起きたデトロイト暴動（12番街暴動）は前述のとおり歴史的にも有名な事件だが、アルジェ・モーター事件とは？それは暴動2日目の夜、アルジェ・モーターに宿泊していた客の誰かが町を警備していた警察官を狙撃したとして、その犯人を探すため警官がモーター内になだれ込み、犯人と狙撃銃を探す中で起きた事件。そして本作はビッグロー監督がその真相に迫るものだ。

その問題点の第1は、実際に狙撃があったのか、それとも本作が描いたように面白半分にはスターター銃（空砲）をぶっ放しただけなのかということ。第2の問題点はクラウドを中心とした犯人探しと銃探しの中で容疑者が死亡したのは、クラウドたちの殺人行為によるものか否かということ。ビッグロー監督はその争点について、明確に自分の視点を示して本作のストーリーを展開していくので、観客は分かりやすい。もっとも、本作を観れば強烈な差別主義者であることが明らかなクラウドが一方的な悪者に見えるが、それはいかかなもの？

当時の現場が混乱の極みにあったことは明らかだから、モーターの部屋の中で容疑者たちを発見したクラウドたちが現場で懸命の取調べをしたのは当然。そして、そこでは暴言はもとより、行き過ぎた暴行もあったかもしれないが、本作でクラウドが見せる、自白させるための「あるテクニック」は興味深い。本作は2時間22分の長尺だが、ビッグロー監督はそのシーケンスだけで延々40分を割いているので、本作ではその（違法な）取調べ（のテクニック）に注目！

■□■黒人ガードマンの視点は？スタンスは？■□■

本作はビッグロー監督の視点と演出で、1960年代の事件であるデトロイト暴動とアルジェ・モーター事件を描くもの。しかし、ここでは「差別主義者の権化」のようなデトロイト市警の警官クラウドと対置される形で、民間のガードマンである黒人男メルヴィン・ディスミュークス（ジョン・ボイエガ）がビッグロー監督の良心を代弁するような役割を演じているので、それに注目！

日本人の私には、制服だけではデトロイト市警の警官と民間のガードマンとの区別がつかないが、当然そこには明確な地位と権力上の差異がある。したがって、デトロイト暴動が起きた時にメルヴィンができることは、現場に駆けつけてきた警官たちにコーヒーを配って気分を安らげることぐらいで、とりたてて暴動鎮圧に役立つことができるわけではない。また、本作全編を通じてメルヴィンのセリフは決して多くはないが、デトロイト暴動の様子はもとより、アルジェ・モーター事件についてもいち早く現場を見ているから、少なくともクラウドの暴走ぶりはよく見えている。しかし、問題はメルヴィンにはクラウドの暴走を是正する権限も方法もないということだ。その結果、クラウドによる40分間の

不当な尋問や犯人探し、拳銃探しに向けての「あるゲーム」を止めることができなかつたばかりか、クラウスが逮捕、取り調べを受けることになる段階では、メルヴィン自身も逮捕され尋問を受ける羽目に・・・。

結果的にそれ以上の「冤罪」にならなかつたのは幸いだったが、こんな不当なことがあっていいの？多分デトロイト暴動やアルジュ・モーテル事件における、このメルヴィンの登場はキャスリン監督の作り物だと思うのだが、さて真相は・・・？

■□■この黒人のグループを知ってる？彼らの明暗は？■□■

中国の王兵（ワン・ビン）監督は、ドキュメンタリー映画の名手。しかし、いくら彼でもデトロイト暴動に直面しなければ、ドキュメンタリー映像は撮れない。その点、2016年12月に観た『チリの闘い』（第1部1975年・第2部1976—77年・第3部1978—79年）3部作は、隠し撮りしたフィルムを使った壮大なドキュメンタリー映画だったから、その迫力はすごかった（『シネマルーム39』54頁参照）。しかし、デトロイト暴動をテーマにした本作は、あくまでビッグロー監督の視点と演出によるフィクションだ。

その意味で興味深いのは、本作がデトロイト暴動事件とアルジュ・モーテル事件そして、クラウスたちの裁判の行方を描くだけでなく、歌で大ヒットし金儲けを夢見る5人の黒人の若者が結成したグループ「ザ・ドラマティックス」の姿をデトロイト暴動の中で描くことだ。デトロイト暴動が発生したのは、彼らが大劇場でまさにデビューしようとしたその時。「いざ出番！」の直前に至って、「公演中止！全員退場！」の決定が下ったから、「ザ・ドラマティックス」の面々は大失望。5人のメンバーは仕方なくバスに乗って帰路について、ヴォーカル担当のラリー・リード（アルジー・スミス）とフレド・テンブル（ジェイコブ・ラティモア）の2人はアルジュ・モーテルに泊まることに。そこで少し羽目を外したことで偶然知り合った白人の女の子ジュリー・アン（ハンナ・マリー）とカレン（ケイトリン・デパー）といひ震気になったのはラッキーだったが、そのアルジュ・モーテルで狙撃事件が発生したため、ジュリーとカレンも、そしてラリーとフレドもそれに巻き込まれ、容疑者の1人としてクラウスの厳しい取調べを受ける羽目に。この「ザ・ドラマティックス」がその後認められ、人気グループに成長したのは喜ばしいが、ラリーだけはグループを離れ、教会の聖歌隊に入ったことが明らかになる。しかして、それは一体なぜ？

本作のストーリー展開をみていると、クラウスの違法な捜査によって殺されてしまった容疑者たちが犠牲者なら、ラリーも犠牲者であることは明らかだが、そのことをどう整理すればいいのだろうか・・・？

■□■射殺のもみ消しは？その法廷シーンにも注目！■□■

ビッグロー監督作品としての本作最大の見所は、中盤の約40分間にわたるクラウドによる「あるテクニック」を駆使しての拳銃と犯人探しの尋問風景にある。容疑者全員を壁に向けて立たせた上で暴言や暴行による取り調べは「想定内」だが、その中の一人が別室に入れられて取調べを受けている際に、銃声を聞かされ、戻ってきた警官から「あいつは自白しないので射殺した」「次はお前だ」と言われると、残った容疑者たちはさて・・・？クラウドはそんな取調べ（のテクニック）を楽しみつつ、犯人あぶり出しのための「尋問」を続けたが、その中で部下の警官の一人が、クラウドの意図を誤解し、別室での「芝居」だったはずの「射殺」をホントにやってしまったから大変。クラウドは慌てて尋問を終了させ、容疑者たちを釈放するのと引き替えに「秘密保持の約束」をさせたが、多分そんな約束の履行は無理だろう。そう思っていると、案の定・・・。

クラウドが強要した秘密保持の約束は、壁に立たされた容疑者たちがすぐに破ったばかりでなく、部下の警官もクラウドを裏切って自白してしまったから、本作はラストに向けて意外にもクラウドたちの法廷風景になっていく。そしてここでは、ジョン・グリシャムばりの(?)カッコいい弁護士が登場し、法廷技術を駆使して証人尋問を中心とする裁判闘争を展開！その結果、白人の陪審員ばかりで構成していたデトロイトの裁判所は、クラウドに対して無罪の判決を下すことに。ああ、やっぱり！良くも悪くも、これが『アラバマ物語』(62年)から今日まで、黒人差別については何も変わらないアメリカの刑事裁判の現実なのだ。

そう思っていると、前述したように、何とそれらの一部始終を見ていた民間のガードマンであるメルヴィンまで逮捕されそうに・・・。これは一体ナニ・・・？ビッグロー監督が描く本作ラストの法廷シーンは「専門外」なだけに多少甘いところもあるが、ロースクールでの「法廷モノ」映画の活用を訴えている私の目には、本作も「法廷モノ」として必見！

2018(平成30)年2月7日記